

反マッコンド文学

——二十一世紀キューバにおける第三世界文学とダビー・トスカーナ『天啓を受けた勇者たち』

久野量一

競うのは速さではない、持久力だ。

ダビー・トスカーナ『天啓を受けた勇者たち』¹

一.

二十世紀末の一九九六年、当時若手だった二人のチリ作家を中心にして短篇集が編まれた。彼らは『百年の孤独』の舞台（マッコンド）をもじり、世紀末のラテンアメリカに現れつつあった新しい風景を（マッコンド（McOndo））と名付けた²。

この時期、ラテンアメリカは大きな変貌を遂げていた。いわゆるジェントリフィケーションにより、都市部には次々に大規模のショッピング・モールが建設され、画一化された都市文化が花を咲かせる。週末には家族で乗り合いバスに乗ってモールを訪れ、映画を見たりウィンドショッピングを楽しんだり、フードコートで食事をしたりする。たくさんあってどれもが似ているモールの中から家族は自分たちの趣味に合うモールを選び出し、訪れるのだ。家に帰ってテレビをつければ、ケーブル放送の数え切れないチャンネルからお気に入りの番組を選び出す。そして米産のテレビドラマやアニメを繰り返し見る³。

短篇集『マッコンド』は、土臭さが漂うマッコンドとは違ふ、グローバリゼーション時代のラテンアメリカを提示しようという目論見のもとに編まれた。このような企図を抱いた編者二人がチリ人であることは偶然ではない。一九七三年にアジェンデ政権が倒されて以降、シカゴ学派が先導する新自由主義がピノチエト軍政下で進められ、チリはラテンアメリカでもっとも早く米文化が流入したと言っている国だからだ。まさにその場所から新しいラテンアメリカ文学が提示されたのは当たり前のことである。

刊行から二十年が過ぎ、短篇集の目次を眺めると、もう一つ当たり前のことに気づく。短篇集には十七人の作家が入っていて、作家は国名のアルファベット順に並んでいる。アルゼンチンにはじまり、ボリビア、コロンビア、コスタ・リカ、チリ、エクアドル、スペイン、メキシコ、ペルー、ウルグアイの合計十カ国。国の数がスペイン語圏の数に到底及ばないことはともかくとして、文学者を多数生んでいるある国の名前がない。グローバリゼーション下のラテンアメリカを描くという編集方針がある以上、間違いなくこの短篇集にこの国の作家は入りようがない。当然の帰結である。

ところで『マッコンド』の誕生には前段があつて、編者の二

人は序文で短篇集胚胎のきつかけとなったエピソードを紹介している。

ある若手のラテンアメリカ作家たちが、米国の文芸誌編集者から原稿を頼まれる。彼らは書き上げたものの、原稿は却下される。一つ目の理由として示されたのは、魔術的リアリズム臭がしないことである。二つ目の理由として、彼らが書き上げた作品が「第一世界のどの国でも十分に書くことが可能」⁴ だからと言われる。編集者の不満はつまり、ラテンアメリカの作家に頼んだのに、第一世界の作家のような作品が出てきたことにある。

ここで編集者の言葉、「第一世界のどの国でも十分に書くことが可能」に注目してみたい。特に「第一世界」という表現に人はそうそう「第一世界」という表現は使わないのではないか。「第二世界」に至っては定着しなかつた感がある。それに対して「第三世界」という用語は広く定着したし、今でもまだ生きている⁵。旧植民地を指す言葉としてこの表現は使いやすい。キューバの文芸評論家で詩人のフェルナンデス・レタマーは「第三世界」概念を文学と関係させて以下のように言っている。

(…) いまだ、ひとつの世界は存在していない。一九五二年に人口学者のアルフレッド・ソヴィーが「第三世界」という表現を発明したとき(…)、実にさまざまな思想家や指導者によってこの表現が広く受け入れられ広められたことは、世界の同質性が存在していないことを確かめるものだ。まだ世界の同質性が存在していないとき、当然のことながら、世界文学も普遍的

な文学もまだ存在しない⁶。(強調原文)

世界はひとつではない。世界はまだいくつかに分かれ、その中には「第三世界」というのがあつて、そこには固有の文学がある。キューバは「第三世界」であり、それにふさわしい文学が書かれなければならない。このフェルナンデス・レタマーのアジテーションめいた文章は一九七〇年代に書かれたものだが、まだ効力を失っていないように思われる。

ラテンアメリカ作家から出てきた作品を読んだとき、くだんの編集者が感じ取ったことは「第一世界」の作家が書くものと同質性で、もともと彼が求めていたはずの「第三世界」発の異質な作品ではなかつた。だから「第一世界」という表現が出てきたにちがいない。では「第三世界」の異質さとは何か。それはこの場合、原稿を却下した最初の理由にある「魔術的リアリズム」を指しているのだろう。ラテンアメリカ文学といえは魔術的リアリズムだと思ひこんでいる編集者が短絡に過ぎることは確かだが、それは一旦措くとして、彼が問題にしたかったことはこういうことではないか。ラテンアメリカはもう「第三世界」ではなくなつたのか？

二.

ラテンアメリカでジェントリフィケーションが進む頃、「第三世界」キューバの首都ハバナのベダード地区に、「反帝国主義のための広場」なるものが設置された。この空間は、米国利

益代表部（現在の米国大使館）の隣にある。「威厳のための広場」とも呼ばれるここには、キューバ独立戦争を戦った建国の父にして、反米思想を十九世紀末に著した作家ホセ・マルティの銅像が立っている。彼は赤ん坊を抱きかかえ、利益代表部を指差している。

反米帝国主義者マルティは、友人への手紙で以下のように述べている。

(…)すでに私は、日々、自分の国と自分の義務とのために命をささげるといふ危険の下にいる(…)その義務とはキューバの独立によつて、時宜を失することなく、米国がアンティル諸島に乗り出し、さらに大きな力でわがアメリカ大陸にのしかかってくるのを阻止することだ⁷。

この文章はキューバの歴史教科書にも引かれる有名なものだ。マルティが抱いている赤ん坊はエリアン・ゴンサレスというキューバ人で、親に連れられてマイアミへ亡命を目指す途中で遭難した、当時六歳の少年である。救出されたエリアンをめぐり、米国とキューバの間で外交問題が巻き起こり、それをきっかけに米国に対する抗議の場として作られたのがこの空間である。米国側は利益代表部の五階に文字盤を設置し、そこから反革命プロパガンダを流してキューバ人を扇動しようとした。それに抗してキューバは文字盤の正面にポールを何本も立てて黒いフラッグをはためかせた。キューバと米国がぶつかり合う戦場となつたのがこの場所だった。

その広場から海沿いの道を進んでしばらく行くと、「カサ・

デ・ラス・アメリカス」がある。ここは革命直後に創設された文化機関で、代表を務めるのは先に引用したフェルナンデス・レタマールである。定期刊行物「カサ」はキューバ革命のイデオロギー（その一つに反帝国主義がある）をラテンアメリカやカリブの各地に伝えるプロパガンダ雑誌として、一九六〇年に第一号を創刊以来、すでに二八〇号以上出し続けている。

キューバは二十一世紀に入っても、反米、反帝国主義の旗を降ろしていない。ショッピング・モールもなければ、ケーブルテレビも、場合によってはインターネットもない。もうお分かりだろうが、『マツコンド』にキューバ作家は登場しない。登場できないのだ。

三.

ガルシア・マルケスが死ぬまでキューバ革命の理想を捨てず、反米、反帝国主義的主張を持っていたことは広く知られている。もつとも彼は、そういう政治的主張をするためだけに作品を書くタイプではない。だがそんな彼の作品を見渡してみると、意外な方法で反米的主張していると見なせるものが出てくる。その事例として「大統領閣下、よい旅を」を採り上げてみたい⁸。

カリブの小国からジュネーヴに亡命してきた青年オメーロスは、妻のラサラとの間に二人の子供を抱えながら、救急車の運転手をして生活を成り立たせている。彼はある日、自分の出身国の元大統領が病院に出入りするのを目にする。その元大

統領は、民衆の支持を受けて当選したものの、軍事クーデタによつて失脚し、姿を消していた。その彼がスイスにいたのである。生活を少しでも楽にしたい若者夫婦としては、同郷の元大統領に取り入つて経済的な支援を受ける絶好の機会とみなし、作戦を練る。

オメーロスは出身国で元大統領を支持していたという逸話を語り、若い時の大統領の写真を見せて彼を悦ばせる。妻のサラは自慢のカリブ料理で大統領をもてなし、そのかたわら大統領の懐事情に探りを入れる。ところが期待に反し、財産といえるものはほとんどないという。妻のサラは嘘ではないかと疑うが（スイスに亡命する偉人が文無しとはありえないと思つている）、その後、大統領の逗留先が移民地区の簡素なアパートであるのを実際に確かめて、心の底から幻滅を覚える。しかしその反動なのか、夫婦には大統領への同情心が芽生え、病身の大統領の介護を買つて出る。何週間かの治療を終えたのち、大統領は夫婦に感謝の手紙とわずかの財産を残し、かつて自分を追い落とした政敵に立ち向かおうと故郷の国に旅立つていく。

これが物語のあらましだが、短篇集『十二の遍歴の物語』はそのどれもがラテンアメリカやカリブ出身者のヨーロッパにおける孤独を扱つている。その意味ではこの物語も、人間関係を持つてない寒々しいカリブ出身者のジュネーヴ暮らしを中心に置き、彼らが同郷人との出会いを通じて人間性を取り戻すまでの物語である。ではこの物語に「米国」なるものがどのような登場しているのか。

元大統領とオメーロスの出身であるカリブの国にはどこかモデルがありそうだ。軍事クーデタによる政変や亡命といった

歴史的経緯なら、グアテマラのアルベンス政権、チリのアジェンデ政権、ドミニカ共和国のファン・ボッシュ政権が挙げられる。物語中、元大統領の出身国の首都はプエルト・サントという名前だが、ドミニカ共和国の首都はサント・ドミンゴである。さらに、元大統領がオメーロスと出会つた場所はサン・クリストバル・デ・ラス・カサスだが、ドミニカ共和国にはサン・クリストバルという地名があり、そこはかの有名な独裁者ラファエル・トルヒーヨの出身地でもある。フィクションだから実在の国である必要はないのだが、まったくの作り事だと思つて読む読者はいない。

ではそのクーデタなり政変なりを裏からお膳立てしている存在が何かといえ、米国にほかならない。二十世紀のカリブ海域史、とりわけスペイン語圏諸島では、この国に言及せずとその歴史を語ることは難しい。妻ラサラはプエルト・リコ出身という設定だが、この島は一八九八年の米西戦争に乗じて米国が支配下に置き、二十一世紀に入るまで主権共同体の地位を得ていない。米国はキューバには独立の道を開いたものの、さまざまな介入を続け、それが一九五九年の革命を引き起こすことになる。ドミニカ共和国の場合、二十世紀前半には米国海兵隊が島を占領し、その後は海兵隊の武力を背景にトルヒーヨの独裁が三十年続いた。

にもかかわらず、これは驚くべきことなのだが、この物語の中で「米国」の名前が言及されることは一度としてない。大衆の支持を受ける大統領、激しい選挙戦、軍事クーデタ、亡命といった状況が次々語られるのに対し、ラテンアメリカの二十世紀を蹂躪した「米国」という言葉は大統領やオメーロスやラ

サラの口にはのぼらないのである。元大統領が自らの失政の背景を若夫婦に語る際には一気に一四九二年までさかのぼり、それはそれでラテンアメリカ論として適切かもしれないが、「米国」の言及が無理に回避させられている。元大統領は当初亡命先としてマルチニークを選び、友人エメ・セゼールに迎えられる。フランス語が堪能でラテン語を読む教養人という設定だが、「英語」はどうかというと、これまたほのめかされることすらない。

ここに至つて、どうやらこの作品では「米国」は言及したくない対象だと見た方がむしろしつくりくることに気づく。つまり「米国」は強制的に退場させられているのだ。名を記すことが愛の告白であるとすれば、名を記さないことはその逆、つまり憎しみの証ということだろう。まさに「黙殺」と言うにふさわしいこの主張は、突き詰めれば、「米国なき世界」の構想である。それほどまで「米国」という存在を知らせずに読めるようにこの物語は設計されている⁹。

ガルシア＝マルケスが米国の入国を禁止されていることを繰り返し書いていることを踏まえて読めば¹⁰、彼からの意趣返し、復讐とみてよい。入国を阻止された作者が作品の中で米国を消すぐらいはやつてもおかしくはない。

四

マコンドの作家から、反米とは無縁のように見える『マッコンド』に戻ってみると、一人の作家の名前が輝いてくる。その

作家とはメキシコ人ダビー・トスカーナのことである。

『マッコンド』の序文を書いているチリ人の編者二人が明かしているが、『マッコンド』の構想にかかわった人物にはこのトスカーナも入っている。この短篇集はチリ人二名とメキシコ人一名の発案によつて作業が始まったのだ¹¹。しかしトスカーナは最終的に編者にはならなかった。のちにトスカーナはインタビューで『マッコンド』についてこう振り返っている。

『マッコンド』の序文はその口調からマニフェストのようになってしまったけれど、この短篇集に短篇が収められたばかりのなかで、ぼくを含む大部分の作家は、マニフェストとは考えていない。というのは、ぼくたちは序文を書いたアルベルト・フゲーとセルヒオ・ゴメスの考えに同調しているわけではないからだ¹²。

発案者の一人がこう言っていることは少々奇妙にも聞こえるが、グループの中に意見の相違があるのは当然といえば当然かもしれない。では同調しかねる部分はどのようなものなのか。少し長くなるが引き続きトスカーナの話聞いてみよう。

「フゲーとゴメスの」この考えというのは、単純に要約するわけではないけれど、米国文化の決定的な影響を受け入れること、ラテンアメリカ文学は都会的であつて田舎臭くあつてはならず、今日的であるべきで、過去を掘り起こすことではないということだ。この点について言えば、何人かの作家は（特にぼくの場合だけけど）、何かとの断絶よりも継続的發展を信じる

文学に属している。新しいと思われる何かを打ち立てることではない。結局文学では反復が頻繁に起きていて、ある本と別の本を異なるものにするのは、何らかの私的な提案、個人的な声だというのをぼくたちは知っている。それぞれの本にぼくたちが見つけるのは新しい文学ではなくて、何らかの言い方をするなら新しい声だ。だから思うのだけれど、ぼくはどちらかといえば、『マッコンド』の序文をぼくの世代のラテンアメリカ文学の提案だとは見なしてはいない。(中略) ぼくはその意味で、マッコンド的ではないだろうね。

トスカーナは実に率直な言い方で、チリ人編者が創出した「マッコンド」グループから距離を置いている。世代で言えば、トスカーナは一九六一年生まれ、チリ人編者のゴメスは六二年生まれ、フゲーは六四年生まれなので同世代である。ということとは、世代で見てもフゲーとゴメスが提起した考えのほうの特徴であるということだ。このことはとても興味深い。

実際、トスカーナが『マッコンド』のためだと思つて選び出した短篇はいくつも却下されることになる。「マッコンド」的でないからというのが理由だ。アメリカの文芸編集者にラテンアメリカ作家が「魔術的リアリズム」でないから却下されたのと同じことが起きているわけだ。結局彼は「難しい人生の夜」と題した短篇を入れてもらう。

それはロックバンドのボーカルが主人公の物語である。若くして地方都市(モンテレイ)でコピーバンドの一員となり、徐々にオリジナル曲も増やしていく。スペイン語でロックを歌うことが評価され、地元ではコンサートでスタジアムを満員にし、

「モンテレイで最高のロッカー」という評判を得る。するとレコード会社に目をつけられる。ハンサムなボーカルは首都のメキシコシティにプロモーションに出かけ、プロデューサーとの打ち合わせやメディア取材を受ける。いざモンテレイに戻り、首都の経験仲間を聞かせると、仲間との関係がぎくしゃくしてくる。仲間としては外見がいいのが取り柄で首都に行かせたのに、いっばしの売れっ子になった気分になっているからだ。こうして彼はバンドから放り出される。そんな彼ももう年齢を重ね、未来のことが不安で仕方ない。今のバンドの稼ぎはゼロで、このままでは結婚式やパーティーの余興として呼ばれるのがせいぜいだ。レストランで生演奏を聞かせて小銭を稼ごうとするが失敗に終わる。それがきっかけでまたしても仲間との関係が壊れ、バンドから追い出される。

地方のバンドマンの悲劇とでも言つていいこの作品中には米国のアニメ・キャラクターや英語圏ロックの歌詞などが頻繁に引用されるので、表面的に見るだけでも大衆文化を取り入れた作品である。もつとも、若者の首都進出とその挫折というストーリーはいかにも普遍的で、それこそ「第一世界」でも十分に書けそうだ。地方の閉塞感、首都への憧れといった要素も取り立てて新奇なものでもない。トスカーナによれば、マッコンド的な作品を書いたのは最初で最後で、「自分の探求は別の方向へ」向かったと言っている。

では「別の方向」とはどこだろうか？ 彼は「歴史を掘り起こすこと」、「ポップカルチャーよりも伝統的な要素」に興味があったと言う。その「別の方向」が実を結んだのが、長篇『天啓を受けた勇者たち』¹³ということになる。

五.

この『天啓を受けた勇者たち』でトスカーナははつきりと反米主義、反帝国主義を主題として採り上げている。それは「歴史を掘り起こす」ことにほかならない。

メキシコのモンテレイを舞台とするこの小説で掘り起こされる対象としてオリンピックピックがある。一九〇八年ロンドン、一九二四年パリ、そして一九六八年メキシコのオリンピックピックである。競技はマラソン。

そしてもう一つ掘り起こされるのはモンテレイという場所である。モンテレイは十九世紀半ばの米墨戦争で戦場になった(モンテレイの戦い)。今は工業都市で距離的にも米国に近く、メキシコの中で最も米国的な都市だと言われている。この土地に生まれ、育ち、小説家になったのが作者トスカーナである。この作品の反米主義については、内容紹介に勝るものはない。物語を追ってみよう。

一九二〇年代、青年イグナシオは、まだメキシコでマラソンというスポーツが定着していない頃、パリ・オリンピックに出場しようと日々練習に励んでいた。しかし出場が叶わなかった彼は、一九二四年七月十三日、パリ・オリンピックでマラソンが行われるのと同じ時刻にモンテレイで走り始める。パリの平地をイメージしてモンテレイの平地を選び、スイス製のストゥプウォッチを身につけて。パリのメダル有力者は米国人クラレンス・デマーである。彼に勝つのが目標だ。

途中、沿道を歩くメキシコ人には珍しがられ、笑われながらもゴールした。タイムは二時間四十七分五十秒。仲間と祝杯を

交わしていると、そのシーンをたまたま同席したカメラマンが写真に撮る。ストップウォッチのタイムも写っている。

パリから届いた結果と照らしてみると、イグナシオは三位に入った米国人クラレンスよりも速いことがわかる。パリで走っていたら銅メダルだったわけだ。イグナシオはクラレンスに自分のゴール後の写真を添えて手紙を書く。「豊かさでは米国に負けているが、マラソンの結果では勝っている。本来の持ち主に銅メダルを送ってほしい」。返事がこないのに、二通目の手紙を書くときには、一九〇八年のロンドン・オリンピックのマラソンのエピソードを添える。「一位でイタリア人がゴールしたのに、なぜか二位でゴールした米国人が金メダルを受賞することになった。しかし人々の記憶に残っているのはイタリア人の方である¹⁴。あなたもその二の舞にならないように、メダルを私に送らなさい」。クラレンスから返事はなく、イグナシオは歴史の教師になる。

米国にメダルを奪われて四十四年が過ぎた一九六八年、メキシコ・オリンピックが近づく頃、イグナシオは歴史の授業で、米墨戦争より前のメキシコの地図を見せ、いかに国土が広大であったかを生徒たちに示す。

イグナシオは、「地図上の」街の幾つかの名前、サン・アントニオ、ロサンゼルス、サン・フランシスコ、サンタ・バルバラを人差し指で叩く。生徒たちに、なぜスペイン語の名前が付いているかと思うのかと尋ねる。そしてモンテレイ湾を指差して言う。この場所は我々の街と同じ名前をしているが、どちらも、
(…) ヌエバ・エスパニーヤ副王領のモンテレイ伯爵、ドン・

ガスパール・デ・スニガ・イ・アセベードに敬意を表して付けられたのだ。だがグリーンゴどもは綴りからrを一つ取っている。というのも連中はrを二つ続けて発音できないからだ¹⁵。

イグナシオの歴史の授業は常にこうした反米的内容だったため、校長や生徒の親から苦情が訴えられている。生徒の中にも「米国の方が道路はいいし、服も安いし、電気製品は性能がいいし、汚職もない。リオ・グランデに国境がなくて、もつと南、モンテレイの南に国境があれば、モンテレイの人は米国人になれたし給料だつてドルでもらえたのに」と言う者がいる。イグナシオはそういう生徒を「売国奴」と呼んで教室から追い出してしまい、それが原因で彼は学校をクビになる。

イグナシオは、いよいよ奪われたメダルと土地を取り戻す時が来たと見なし、生徒たちに声をかけて軍隊を組織しようと思いきだす。テキサスへ進軍し、グリーンゴたちに命ずるつもりだ。ただちにテキサスを後にせよ、さもなければ暴力的に立ち退いてもらうことになる、と。アラモ砦の奪還、それが彼らの目標である。

物語ではその後、イグナシオの誘いに乗った五名の生徒とイグナシオの進軍が語られる。案の定といえいいのか、奪還は失敗に終わる。ある者は死に、ある者は日常に帰り、ある者は気が狂う。そして迎えた十月二十日、メキシコシティでマラソンの号砲が鳴るとき、イグナシオはモンテレイで二度目のマラソンをスタートさせる。今度こそ、メダルを取り戻そうとして。

六

この物語を、現在のメキシコにおける反米主義の実態と解する読者はメキシコにもそうそういない。著者トスカーナを筋金入りの反米主義者、極端な国粹主義者だとみなす人もいない。もちろんそういう読者がいたら興味深いとはいえ、やはりこの物語は、書評や先行研究などでも指摘されるように、「ドン・キホーテ的」、「空想的な」ものとして読まれている¹⁶。イグナシオの発言にしろ、進軍にしろ、そのどれもが『ドン・キホーテ』における風車への突進と同じ種類のユーモアに満ちている。奪還の物語にオリンピックのマラソンが据えられているところにも、ある種の娯楽性が感じられる。

しかし、ではまったく荒唐無稽な空想物語かというところ、とも言い切れまい。読み手はメダルや領土の奪還が根拠のあるものだと感じながら読み進める。米墨戦争での米国の領土獲得についての知識がなくとも、ロンドン・オリンピックにおける米国の手口には納得がいく。この物語は「第三世界」ならどこでも頻繁に起きていることを、メキシコの事例で語っているにすぎない。

米国内のスペイン語の地名について、おそらく（日本でも）ほとんどのスペイン語教師がイグナシオのように話題を展開する。「いつそ米国人に生まれたかった」という生徒の反論は、物語の設定では一九六八年の出来事にもかかわらず、決して古い話には聞こえない。受け入れるかどうかはその人次第だが、その考え方は今日的だ。

メダルや領土は過去の収奪として掘り起こされるが、それは

昔話がしたいからではなく、過去と現在が何ら変わっていないことを示すためである。米国勢力の南下は世紀末に始まったことではない。メキシコの場合、十九世紀からすでにその巨大な影響力がのしかかっている。巨大な力に支配される日が長くになると、人は気づかぬうちにそれを既成の事実だと諦めてしまう。米国文化は我々の日常生活に影響を及ぼしている。しかしそれと同時に何かが奪われていることを忘れてしまいがちだ。この物語は、そんな風に眠らされた抵抗の力の目を覚まそうとして構想されている。もちろん取り戻すまでの道のりは果てしなく長い。その行く末は小説で書かれているとおりのか。

筆者がこの本のことを知ったのは、先に触れたキューバの「カサ・デ・ラス・アメリカス」に籍を置く文芸評論家ホルヘ・フォルネーの文章を通じてだった¹⁷。その後、この小説が同機関の文学賞を受賞していることも知った¹⁸。多くの場合、何かの受賞作であれば本の裏表紙あたりで触れられてもいいのだが、トウスケツツ出版のこの本にはそういう言及がない。

「カサ・デ・ラス・アメリカス」は創設以来、主にラテンアメリカの作品を顕彰し、作品に一定の価値を与えている。そして文学賞以外でも、古典であれ、現在書き続けている作家の作品であれ、叢書に入れてキューバ版を刊行している。これらは商業出版というよりは、読まれるべき作品として多くの人の目に留まることを目的としたものだ。革命によって生み出されたこのような文学制度は、キューバによる「第三世界」文学の創設でもある。トスカーナのこの本のキューバ版があるかどうかは知らないが、キューバがこの本を顕彰することによって特別な価値を与えていることを、二十一世紀の「第三世界文学」の

可能性と受け止めたい。マイアミからわずか九十マイルながら、米国から最も遠いキューバだからこそ、米国国境すぐ近くの、最も米国的な都市モンテレイで書かれたこの作品を見出した。この作品はメキシコ人によって書かれたキューバ文学でもある。

(Endnotes)

- 1 Toscana, David, *El ejército iluminado*, Tusquets, Barcelona, 2006, p.47.
- 2 〈マッコンド〉という命名によって、マッキントッシュやマクドナルドの流入したラテンアメリカという意味も込められている。Fuguet, Alberto and Sergio Gómez(ed.), *McOrdo*, Mondadori, Barcelona, 1996.
- 3 例えば、コロンビアの首都ボゴタの人気ショッピング・モールとして「アンデイーノ」がある。この施設は一九九三年に完成し、一九九五年にはコロンビアで最初のマクドナルドがオープンした(もともとボゴタに建造された最初のモールは一九七六年完成のウニセントロである)。ボゴタには「バルケ93」という周囲をレストランで囲んだ衛生的な公園があるが、それがオープンしたのも一九九五年である。メキシコシティのモールでは、コヨーアカン地区の「パラシオ・デ・イエロ」が一九八九年オープンである。また、スペイン語版CNN (CNN en español) の放送開始は一九九七年。
- 4 Fuguet, Alberto and Sergio Gómez(ed.), *op.cit.*, p.10.
- 5 朝日新聞紙上では、「第三世界」は七回使われているのに対し、「第一世界」と「第二世界」は一度もない(二〇一六年十月十八日、過去一年分の記事検索を行なった結果)。
- 6 Fernández Retama, Roberto, *Para una teoría de la literatura hispanoameri-*

- cana, Instituto Caro y Cuervo, Bogotá, 1995, p.79.
- 7 キューバ教育省編『キューバの歴史』（後藤政子訳）、明石書店、二〇一二年、百九十二頁。
- 8 ガルシア＝マルケス、「大統領閣下、よい旅を」、「十二の遍歴の物語」（旦敬介訳）、新潮社、一九九四年、十五―五十頁。
- 9 ガルシア＝マルケスには、米国を象徴する飲み物「コカ・コーラ」とキューバに関するエッセイがある。米国との国交が途絶したのち、コカ・コーラが飲めなくなったキューバ人が努力して国産コーラを生産に至るまでを喜ばしい話として語り、海外に仕事で出たキューバ人が土産品としてコカ・コーラを買って戻ったが、革命から長く経過していたために、すでにコカ・コーラを知らない人がいて喜ばれなかったというエピソードで締めくくられる（García Márquez, Gabriel, “Allá por aquellos tiempos de la Coca-Cola”, *Notas de prensa*, Mondadori, Barcelona, 1999, pp.209-212.）。ガルシア＝マルケスは一九五〇年代にソ連を訪れた時にも、ソ連を「コカ・コーラの広告がない土地」と評している（García Márquez, Gabriel, “URSS : 22.400.000 kilómetros cuadrados sin un solo aviso de Coca-Cola”, *De Europa y América*, Mondadori, Barcelona, 1992, pp.617-623.）。「米国なき世界」はガルシア＝マルケスが長年温めている構想と見てよい。
- 10 自分がいわれない理由で米国に入国を阻止されたというのもガルシア＝マルケスがよく語るエピソードだ。彼は米国のそうした対応を「米国批判者に対する帝国主義的懲罰」と名付けている（García Márquez, Gabriel, “USA : mejor cerrado que entreatuerto”, *op.cit.*, pp.404-407.）。なお、カブレラ＝インファンテはガルシア＝マルケスが告白する米国入国禁止措置を虚偽だと指摘する（Cabrera Infante, Guillermo, “Nuestro prohombre en La Habana”, *Mea Cuba*, Alfaguara, Madrid, 1992, pp.273-281.）。カブレラ＝インファンテの説が正しいとすれば、ガルシア＝マルケスは嘘を用いてまで米国にとって

「好ましからざる人物」であろうとしていることになる。

- 11 安藤哲行『現代ラテンアメリカ文学併走』、松籟社、二〇一二年、四十三―五十七頁。
- 12 本稿で引用するインタビューの出典は以下の通り。Brescia, Pablo A. J. and Scott M. Bennett, ¿Nueva narrativa? Entrevista con David Toscana, *Mexican Studies/Estudios Mexicanos*, Vol.18, No.2 (Summer 2002), pp.351-362.
- 13 Toscana, David, *El ejército iluminado*, Tusquets, Barcelona, 2006.
- 14 このエピソードは実話で、一位のランナーが支えられてゴールしたことに米国が抗議して順位が繰り上がっている。日本のマスコミでもよく取り上げられる（『朝日新聞』一九九六年三月十九日付朝刊、『読売新聞』二〇一二年四月十二日付朝刊など）。
- 15 *El ejército iluminado*, pp.17-18.
- 16 Abeyta, Michael, “El humor negro, la burla de la modernidad y la economía del libro en la narrativa de David Toscana”, *Revista de Crítica Literaria Latinoamericana*, Año 36, No.72 (2010), pp.415-436. 452
- 17 Fornet, Jorge, “Narrar Latinoamérica a la luz del bienenarío”, *Elogio de la incertidumbre*, Ediciones UNIÓN, La Habana, 2014, pp.7-34. 「天啓を受けた勇者たち」とともに、ヘドロ・レメベル（チリ）、マリオ・ベジャティン（メキシコ）が論じられる。
- 18 <http://www.casadelasamericas.org/premios/literario/honorificos/arguedas/2008/achachm>（最終アクセス二〇一六年十月二十六日）